



雪印メグミルク

「酪農の未来を拓くお手伝い」

# RDCD NEWSLETTER

～RESEARCH & DEVELOPMENT CENTER FOR DAIRY FARMING～

2026 3

NO. 3

## Topic 01 令和7年度 日本獣医学会学術集会で学会発表を行いました！

※PDF版はタイトルクリックで当該記事参照可能

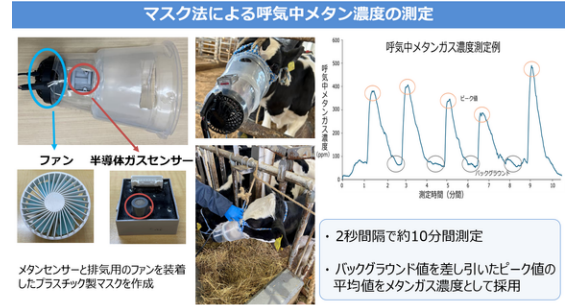
2025年9月3日～6日に宮崎市で開催された第168回日本獣医学会学術集会において、酪農総合研究所の野崎 則彦(獣医師)が「乳用子牛の第一胃発達指標としての呼気中メタンガス濃度の有用性」と題して発表を行いました。本研究は北里大学獣医学部・鍋西久准教授との共同研究の一環であり、これまで両者は酪農生産現場におけるメタンモニタリング技術の実証を継続して進めてきました。今年8月には、北海道において成牛および牛舎環境のメタンモニタリング結果を発表しています。日本獣医学会は、全国の大学・研究機関・行政・臨床現場の専門家が集い、最新の研究成果を共有する日本最大級の獣医学フォーラムです。畜産分野においても、動物福祉や生産性、環境対応など多角的な視点から討論が行われており、学会発表は研究を社会へ橋渡しする重要な場となっています。



学会発表を行う野崎研究主事



共同研究者である北里大学鍋西久准教授と



学会発表スライドの一部抜粋

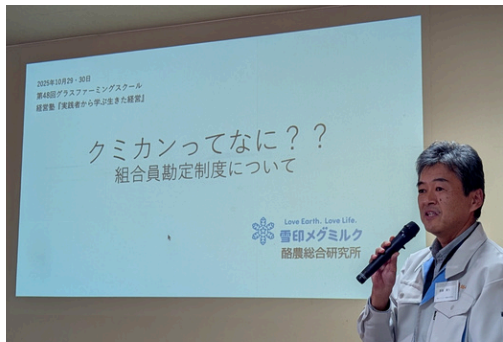
## Topic 02 第48回グラスファーマーミングスクール経営塾で講演会を行いました！

2025年10月29日(水)～30日(木)にかけて北海道中川町(ボンピラ・アクア・リズィング)にて、酪農総合研究所の柳瀬兼久研究リーダーが「クミカンってなに? ～組合員勘定制度について～」と題し経営塾での講師を務めました。

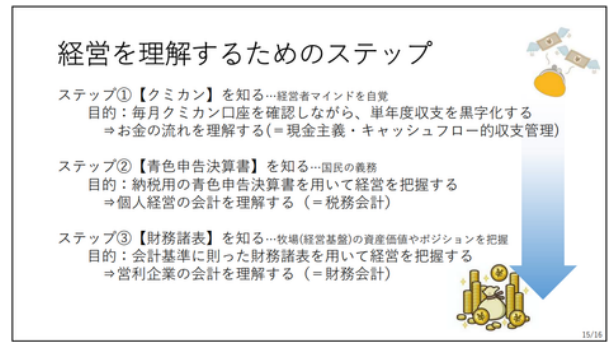
グラスファーマーミングスクールとは「創地農業21」という団体が運営する1995年に発足された農業・酪農に関する指導・研究・教育機関です。農業者の育成を目的とし、持続可能な農業の発展や環境との共生を重視した取り組みを行っています。農業の未来を見据え、意欲的な農業者や研究者とともに、新たな農業の可能性を追求しています。事務局はファームエイジ株式会社内に設置され、運営の中心を担っているのが特徴です。今回のグラスファーマーミングスクールでは経営塾と題して『実践者から学ぶ「生きた経営」第1ステージ』として4名の酪農家と1名の研究者(柳瀬リーダー)が「生きた経営」をテーマにレクチャーを行い30名の酪農家や就農希望者が参加しました。当日は意外と知っているようで知らないクミカン制度や原価償却費などについて説明を行い、参加者の皆さんからは、質疑応答や夜の部での意見交換会など、活発な議論を行うことが出来ました。



柳瀬兼久研究リーダー



当日の経営塾で講師を務める柳瀬研究リーダー



経営塾での発表スライドの一部抜粋

## Topic 03 酪農総合研究所がTV番組に出演しました！

当社が取材協力したHBC北海道放送の特別番組「杉谷拳士のミルクのミライ～健やかな自然が育む贈りもの～」が、1月17日(土)に放送されました。酪農総合研究所でも取材に協力し、越智副部長が紹介されました。ゲストには、タレントで元北海道日本ハムファイターズの杉谷拳士さん、HBCアナウンサーの大竹彩加さんが来られ、非常に穏やかな雰囲気の中撮影が行われました。取材では、経営実証農家の馬場牧場(由仁町)、大宮牧場(標茶町)にて行われました。撮影の様子を一部ご紹介します。



酪総研の図書資料室で取材に対応する越智副部長



杉谷さん・大竹アナを囲んだ関係者にて

## 酪総研懇談会で2名の研究員が発表を行いました！

2025年11月18（火）に岡山県で「酪総研懇談会」が開催されました。酪総研懇談会は「日本酪農研究会」の開催に併せ、日本酪農青年研究連盟と酪農総合研究所の情報交換の場として毎年開催されているもので、当日は酪青研役員・事務局スタッフを含め約30名が出席しました。

まず初めに、佐々木貴史研究員が「2023年牛乳生産費統計の整理」と題して、直近の生産費から見える酪農経営の現状について説明を行い、直近の生産費動向や2024年の生産費傾向についての詳細な説明を実施しました。

続いて大山冬馬研究員からは「プレゼンス向上に向けた広報・技術普及強化プラン」と題して、技術普及活動の取組みについて説明がありました。酪総研の研究成果の「技術普及活動」を活性化するための課題、広報推進プロジェクトや酪総研ブランドのキービジュアル製作、現在対応中の特許庁への商標出願状況について企画紹介が行われました。

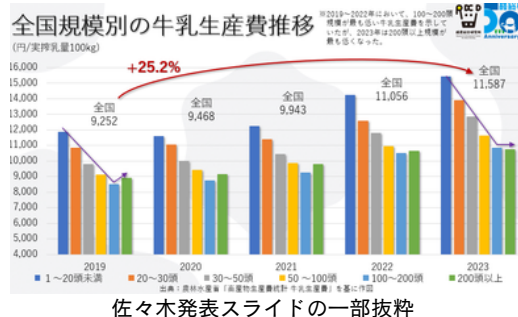
当日参加した酪農家の皆さんからも質疑応答が活発に行われ非常に有意義な会となりました。酪総研HPでは、「牛乳生産費統計」の整理と題してPDFで公開しておりますので、ぜひご覧ください（HP内の「調査研究レポート」に資料掲載）。



佐々木研究員



大山研究員



佐々木発表スライドの一部抜粋



大山発表スライドの一部抜粋

## 酪総研 コラム

### 酪総研50年 ～児玉由一先生～

この度、酪総研コラムを担当させていただきます。昨年12月1日付で酪農総合研究所酪農研究グループに着任致しました本間義行と申します。以後、よろしくお願ひ致します。今年、2026年3月で酪総研が50周年を迎えることは、前回・前々回の酪総研News letterで皆様ご存じのことと思われまふ。小職は2月で50歳を迎え、酪総研と同じ1976年生まれということもあり、このタイミングの異動はたまたまなのでしょうが、何か不思議な縁を感じております。

このコラムを書いている時は、酪総研シンポジウムの準備期間中なのですが、準備している展示パネルのなかに、酪農総合研究所年表というものがあり、1976年の設立時に「昭和51年3月15日 株式会社酪農総合研究所設立社長 児玉由一、所長 大原久友」と書かれているの気が付きました。

酪総研は設立当初、中立性を堅持するため、株式会社としてスタートしていますが、初代社長の児玉由一先生は元中標津農業協同組合の代表理事組合長であり、当社の社長、会長も歴任、北海道の酪農発展に貢献され、中標津町の名誉町民となられている方です。

私が児玉由一先生の名前を知ったのは、今から5年前、雪印種苗(株)と合同で毎年開催されている酪農研究会の場で、雪印種苗さんが創立70周年ということもあり、両社の歴史を振り返り発表するというもので、当時酪農部道東駐在（なかしべつ駐在）にあり、調査の段階で1975年に全道に先立ってホクレンが根室管内で集送乳合理化を進めた際に児玉先生父子が当時のホクレン中標津支所長に協力をしたという過去を知り、そのお名前を初めて知りました。また中標津町の公共施設を訪れた際に名誉町民として顕彰されていることを知り、強く印象に残っております。児玉先生は1900年に岡山県に生まれ、1916年に渡道、1919年に中標津町武佐地区（旧標津村）に転住されました。以来、地域開発促進と酪農発展に寄与、1948年から60年まで中標津農業協同組合代表理事組合長、北海道酪農協会根室支部長、根室生産連会会長を歴任、1947年から59年まで北海道道議としても根釧酪農の確立、農業団体の育成、地方自治発展に尽力、その功により、1967年に紫綬褒章、1973年に勲三等瑞宝章を叙勲されています。

1971年には雪印乳業社長、1973年に会長に就任、1976年に株式会社酪農総合研究所の社長に就任、経団連理事や日本乳製品協会会長などの要職も歴任されるなど、酪農乳業を牽引されてきた方でした。

児玉先生は酪総研社長就任わずか4か月後に病に倒れ、急逝されますが、長年にわたる北海道酪農発展に寄与してきたことから「酪農の父」とも言われています。その児玉先生の遺稿集を先日、書店で見かけて購入しました。亡くなられてからも50年という今年でもあります故人が酪総研の未来をどう見ていたのか、その想いを心に留めながら本を読み進め、研究業務を行っていきたくと思っています。

(コラム執筆：担当課長 本間 義行)



### 経歴

- 1985年 栃木県宇都宮市出身
- 2008年 酪農学園大学 酪農学部酪農学科 卒業
- 2011年 酪農学園大学大学院 酪農学研究科修士課程 修了
- [論文テーマ]
- 「自由記述文の分析による牛乳に対する消費者イメージの解明」
- 2011年 雪印メグミルク株式会社 入社
- 酪農部 北海道酪農事務所（大樹工場駐在） 配属
- 2013年 酪農部 西日本酪農事務所（神戸工場駐在） 配属
- 2016年 酪農部 西日本酪農事務所（福岡工場駐在） 配属
- 2022年 酪農総合研究所 酪農研究グループ（北海道支社） 配属
- 2025年 酪農部 北海道酪農事務所（札幌工場担当） 兼務

### [学位・資格]

農学修士／第二級陸上特殊無線技士免許／講道館柔道二段

### [これまでの実績（学会所属・専門分野・調査研究等）]

- 酪農危機にどう立ち向かうか～世界の酪農に学ぶ～（発表）
- 多草種混播圃場における植生変化とその可能性に係る追跡（レポート）
- 哺育牛舎の環境モニタリング調査（レポート）
- JA 北オホーツクデイリースクール「牛乳生産費について」（発表）

### [関心領域]

- データやエビデンスに係る科学的アプローチ調査
- GHG排出モニタリングと酪農生産性向上による環境負荷低減 他

### [所長からの人物紹介]

- 佐々木研究員は「データに基づく分析」を得意としている。彼の酪農現場に対しての誠実さは日々の業務から感じ取れる。データ解析を得意としており、生乳生産費データや様々なデータベース化に貢献しており、毎年開催される酪総研懇談会では生産費統計についての報告も行い好評である。2024年からは労働組合の職場委員に就任している。今後は若手を牽引するリーダーとして活躍して欲しい。

(研究所長：津田知亮)